

神戸市公園緑地審議会
令和7年度 第1回 計画・緑化部会

日時：2025年7月25日（金）15:00～17:00

場所：神戸市職員研修所 第2研修室

出席者：（対 面）赤澤部会長、白砂委員、馬場委員、松下委員、天川委員
（WEB）新保委員、鳥居委員、深町委員

1. 開会

2. 議事

=事務局より、議事内容の説明=

赤澤部会長

- ・ 次回は本編（再度）と実践編を議論するため、今回は本編をしっかり議論していきたい。
- ・ 全体構成、1章～6章までの各章に至るまで意見をお願いしたい。

深町委員

- ・ 全体を通してよくまとまっている。
特に「知る」「触れる」「深める」というステップを踏んで、広く市民が緑と関わっていくということを明確に書いている点が良かった。
- ・ ①「森林・里地里山」とセットで言葉が出ているが、定義として里地里山とは、その中に森林や農地がモザイク状に含まれたものを呼ぶ。里地里山に森林や農地が含まれているにも関わらず、それ以外に「森林」や「農地」という言葉が出てきたり、「農地・里地里山」とセットで出てきたりする。
空間上での言葉の整理や使い方について説明・検討をしてほしい。
- ・ ②ウォーターフロントの緑について、神戸の特徴は海辺の景観や緑だと思うが、こういう場所の緑のあり方、植生や景観、産業などどういう緑を目指しているのか
- ・ ③大きな木は危険なため伐採するという話はあるが、一方で、全国的で災害対応の予防などのために、地域にとって歴史的にも文化的にも意味のある大きな樹木が厄介なものという位置づけになり、伐採されて見られなくなっている。
単に危険防止だけでなく、歴史文化的に大事な緑に対してどうかかわっていくか、もう少し「大事にしていく」という明確なメッセージを強く出してほしい。

事務局

- ・ ①今一度、用語の整理はさせていただく。
どの部分を強調するか、という視点で連続させたり個別に記載したりしている。
- ・ ②神戸のウォーターフロントは、須磨やアジュール舞子などの海岸もあるが、基本的には人が寄り付かないような工場や倉庫街が大半を占めている。
一方で、現在は、「都心ウォーターフロント」として三ノ宮南側の突堤などで大きく姿を変えようとしており、TOTTEI PARK など、にぎわいを創出する開発や人を港側に呼びこむ開発をして生まれ変わっている。
それに伴い、そのような場所で、にぎわいを増やせるような緑や空間を創っていききたい。
- ・ ③歴史的文化的な資産である大木は保全をしていきたい。
既成市街地ではまとまった緑を確保するのは難しいため、民有地の緑やまとまった社寺林の緑は市民の木市民の森として、助成金も出しながら保存・保全ができるように取り組んでいる。引き続き、そのような取り組みを進めながら、大事なものはきちんと残すという姿勢はこれからも続けていく。
昨年でも街路樹や公園樹木が倒れるという事象があり、車を潰すという事象もあったが、倒れた街路樹も公園樹木も外見的には内部空虚など劣化がわからないものだった。大木化・老木化によって病気などが進んでいる事もあるので、都市の緑で安全安心を考える上で、人が接する機会の多い場所の樹木は場合によっては更新もしながら樹木の管理をしていきたい。
本当に大事なものはしっかり守って残し、街路樹や公園樹木は適切に安全安心の観点で管理をするという考え方である。

深町委員

- ・ ③街路樹などの樹木は安全第一であるということはその通りだと思う。今後の施策の展開として、事前に樹木の状態を色んな人が気を配ってチェックできるような体制の拡充、大切な樹木が残るような支援策や専門家との連携の充実ができれば。
- ・ ②にぎわいは大切だが、海岸線の産業だけでなく元の浜などの場の特性（自然環境・文化）をどのようにウォーターフロントとして活かしていくか、再生していくか、といった具体的な緑の質も一緒に考えながら取り組んでいけるように工夫をしてもらいたい。

白砂委員

- ・ p.8の神戸のみどりの将来像は4つに分類されているが、「森林・里地里山」のように森林と里地里山をひとくくりにするのは問題があるのでは。「森林」と「里地里山」などにすべきでは。

森林は自然が中心で、里地里山は人が住んでいて農業生産があるため、これをひとくくりにするのは大雑把すぎる気がする。

赤澤部会長

- ・ 俯瞰上の色んな繋がりをもつという観点も踏まえて森林を分けるかという議論。本当の意味での森林の位置付けも難しく、人が住んでいたり、社寺があったりするため、完全な「森林」は神戸市の中では分けるのは難しい。そのあたり、検討をお願いできたらと思う。

白砂委員

- ・ 森林の中でも森として見えているようなところはそのように位置付けるべきで、農地と一緒に位置付けてはいけない。

赤澤部会長

- ・ 農地も海も都市緑地法上は「緑地」になるが、農地は農政計画課など所管が完全に違う場所はコントロールしにくい。
子どもの環境教育や福祉、にぎわいなど、全然異なる部署とコラボし波及効果を生み出すことを踏まえると、少し丁寧に分けた方がコラボもしやすいかもしれない。一緒にせず、コラボしやすい分類も必要かもしれない。
- ・ 海の緑について、神戸市には魚付き林みたいなものはないのか。

事務局

- ・ 空港島で緩傾斜護岸を設け、魚が生息しやすいように環境整備しているものはある。

赤澤部会長

- ・ 護岸などで魚の生息環境をつくるのも緑。
- ・ 神戸市では危ない突堤や防波堤で魚釣りをするのは禁止しているが、新しく魚釣り公園を再整備するなど、こういう場所は環境躍進や利用を含めて「みどり」になる。保全・保護の植物だけでなく、利用も含めて単なるにぎわいだけではなく、須磨のようににぎわいの海辺やレクリエーション緑もあるし、植物もある、といった（複合的な海の）緑もあるため、よく考えた方が良い。

事務局

- ・ 確かに緑を森林と里地里山で一緒にするのはどうなのか、というのは仰る通りである。森林・里地里山は市街化調整区域になり、神戸市には山場の「緑の聖域」と農地の「人と自然との共生ゾーン」がある。その辺りも分けて書くのか、また内部で考え

ていきたい。

赤澤部会長

- ・ 恐らく昨年の危険木を伐採するというのは土木との関係で、整備する際に健全に育成できる地盤が全くないため倒れる。
- ・ そもそも法律上、街路樹は道路付属物でかなり過酷な環境のため、健全な育成管理をしていくという視点が重要では。
- ・ 他の点についてもお気づきの点はあるか。

白砂委員

- ・ これは 25 年の計画だが、2050 年の未来を予測して立てているのか。
調べてみると 2050 年は温暖化で猛暑日が 2～3 倍になるようで、このような環境危機がある中で緑の果たす意味は大きいと思う。2050 年を考えると果たしてこういう計画で良いのか。例えば、街の中を歩く際など、これから都市の緑（街路樹）の重要性はますます大きくなる中で、いかに街路樹を増やしていくか、ということを踏まえると、緑被率 30%で「達成している」という話ではないのでは。ヨーロッパの主要都市では緑被率は 40%台あり、30%では追い付かないのではないかという気がした。
- ・ p.7 に「みどりの効果」とあるが、緑に効果だけ求めるのも若干違うのでは、効果のためだけに緑を植えるのか。緑の重要な役割で、メンタルの効果とフィジカルの効果と 2 つある。
また、「緑生都市」とは何なのか、定義が丁寧にいるのでは。
要するに、このみどりの基本計画の中で何を目指してこれを実現するのか、ということとを前段階にあるともう少しわかりやすいのでは。
- ・ p.19 の「知る」「触れる」「深める」の図で緑の絵が無いのがさみしい。
- ・ 一番大事なのは、「何のためにこの計画をするのか」、目指すのが「緑生都市」であるとすれば「どのようになれば『緑生都市』なのか」、25 年というスパンをみて計画する姿になる。

赤澤部会長

- ・ 環境変動に関しては、新保先生がよくご発言いただいていたが、この辺りで何かご意見はあるか。

新保委員

- ・ 課題は喫緊なものを挙げているが、最終的な目標や施策があまりそれに対応していない。「人口減少に対してどのように緑豊かに空間を変えていくか」、「高温常態化に対してどのようなソリューションを出そうとしているのか」など、何も書いていなかった

た気がする。

今後のみどりの視点と課題に沿って、4章と5章を整理し直した方が良いのでは。

- ・ ウォーターフロントの緑など、それぞれの地域でどういった課題があって、それに対してどういう緑の形で応えていくのか、ということもあった方が良いのでは。
- ・ 既成市街地では暑いと緑陰を増やし、正午に街中において何%を占めるのか、など具体的な評価指標があっても良いのでは。

満足度だけでなく具体的に、涼しさの体感や気温低減のデータ、人流のデータ、風の流れデータも使って具体性のある方針を立てられるようにした方が良いのでは。

- ・ 市民参加については、「デジタルツールも使って市民を巻き込んで参画を図る」という新しい試みも書いた方が良いのでは。

馬場委員

- ・ 防災という視点では、気候変動に関しては被害が出てからでは追いつかない、という状況が想定される中で、p.14～p.15で8つのうち3つでそれに関わるようなことが書かれているにも関わらず、あまり全体からはそれに向かって取り組むということが見えなかった。
- ・ 世界の都市のグリーンインフラの計画を見ても、実現しているかどうかはともかく、積極的な構想を掲げているが、日本は全体として打ち出しが弱い。
グリーンインフラやグリーン・ブルーインフラをまちづくりの中で考えていき、建築までデザインガイドラインを出しながら、全てで取り組んでいくということもされている。
- ・ 「全てで」というのは難しくても、もう少しメリハリをつけても良いのでは。倒木が心配のため人が歩くところは木を少なくするが、そうすると暑くて歩けない、という矛盾があり、両方を解決できるような答えはない。
どこを歩かせるか、どこを重点的に緑化するか、という視点も必要。
水害や、樹木の生育に影響を与える土について、土の部分が非常に少ないため、もっと浸透させるという視点で、アスファルト舗装のあり方から学ぶことも考えていかなければならないのでは。
- ・ グリーンインフラの言葉が散らばっているが、もう少し一貫したコンセプトや方針があっても良いのでは。

天川委員

- ・ 25年先の「緑」をページの上で書くのはどうかとは思った。
- ・ p.5に「緑を知らない人でも読みやすい内容」とあるが、言葉がわかりにくい。書き方を整理しないと、全面的に言葉を集約しすぎてわかりにくくなっている部分がある。

- ・ 具体例と課題のところでも言葉がわかりにくくなっている気がする。
例えば、ウォーターフロントの緑で港（漁港）と都心のウォーターフロントで違うということだが、p.9 のタイトルは「海岸と埋立地」で、項目が「海岸」と「ウォーターフロント」となっており整合性が無い。「都心のウォーターフロントとそれ以外の海岸線」のように説明になるような書き方が必要なのでは。
- ・ p.15 「大規模施設を含む公園施設の老朽化による危険性の増大」など、この書き方だと読んでもピンとこない。「緑」を知らない人が読んでもわかるような書き方が必要だと思った。
- ・ p.16 の「まち中における緑の面積の割合」が目標値は「3 割以上」で現在の状況が「31.4%」となっているが、統一した方が良い。
- ・ p.17 の「緑に関する活動に参加している市民の割合」が「『機会があれば参加したい』と回答した人が 40%にのぼる」とあるが、どういう機会があればということに参加したいと思っている人が 40%にのぼるのかがわからない。
「市民が気軽にみどりに参加できる機会」というのがどういう活動を指すのか、ひらがなの「みどり」とあるため p.6 より「緑」の空間における取り組みや活動を示すが、そこまで戻って読むのか。
- ・ p.19 の図も「知る」「触れる」「深める」から「知る」に戻ったら広がっていない。元に戻っているだけになっているため、広がっているのなら広がっているような描き方にしないと読む人にもわからない。
- ・ p.21 「既存の緑を有効に活用します」の具体例「長寿命化計画等に基づき、適切に改築更新の実施」も意味がわからない。
- ・ 全体的に噛み砕いて具体的に書こうとすることで余計にわからなくなっているため、もう一度振り返ってほしい。

事務局

- ・ 25 年先の計画という点について、樹木や空間をもう少し長い視点でみた方が良いのではという考えで全体では 25 年としているが、前計画と同様に、10 年くらいで計画の見直しを行う。25 年の計画と言いながらも、途中で最低 1 回は見直しを図り、その時の状況を踏まえて見直しをしていく。
- ・ 計画で何を目指すのか（コンセプト）という点について、「緑生都市」は緑とともに生き続ける都市と掲げている。一方的に「今ある緑をどうするか」ではなく、今回の基本計画の力の入れどころは、「市民の皆さんにも関わってもらって、一緒にやってもらいたい」という考えで、p.19 の「知る」「触れる」「深める」の図も当初案では緑緑していたが、一般の人にもとつきやすく敷居が高くないようにイベントの絵を掲載した。
- ・ 猛暑日が多くなるのは現実的にそうなるだろうが、樹冠を大きくしていくような取り

組みはこれからも大事である。神戸市内の土壌は樹木が生育するのに適したものではない中で、土壌改良材の成分を見直したり、植樹ますの大きさを広げたり、ということも昨年から取り組み始めた。こういうこともきちんと書いておく必要があると思う。

- ・ 指標については、もう少し研究させていただいて、例えば風の流れのデータでは、全体の神戸の風の流れは西風だが、六甲山から吹く風などもう少しミクロな流れで書きこめるようなものがあれば書きたい。

出した指標が今後追っていけるものなのか、5年や10年でフィードバックして改善できるのか、その辺りも含めて研究させていただく。

- ・ グリーンインフラや土の部分で木を大きく育てていく取り組みも、交差点で木陰の下で人が信号待ちをできるような仕組みや透水性舗装の採用など今後もやっていくし、書き込んでいきたい
- ・ 用語も仰る通りで、普通の人は分からない。用語も改めて見直していきたい。
- ・ 本編が25ページほどで、できるだけ簡素化してもっとページ数を減らしたい。その中でどういった書きぶりをするのかは検討する。
次回議論いただく実践編はページ数を指定しないため、そちらで細かい内容を書き込んでいきたい。
- ・ 本編はシンプルに、実践編はもう少し書き込んでいくという構成で考えていきたい。

赤澤部会長

- ・ 第1章で基本理念が前のまま同じものが載っていないため、「変わらないのか、今何か変わっているのか」「緑生都市って25年前と同じ考え方なのか」ということもわかりにくいかもしれない。

神戸のみどりの将来像も最初に描いてしまうため、あまり色々と描けずに模式図になる。よくある緑の基本計画は4章くらいに将来像があるが、前に背景や課題、将来を描いた後、基本理念を噛み砕いて細かく書いたり、どう緑を配置したらより効果的なのか書いたり、今の写真ではないまちや水辺や森の緑の未来絵を描いて基本理念と一緒に示したりした方が分かりやすい。

- ・ 圧縮するために、2章のデータが多いのでこちらはそこまで詳しく書かずに実践編にして、要点のみ「社会の潮流と実際のデータからわかる変化」ということで2ページくらいにまとめてみては。
- ・ グリーンインフラなど大きな考え方など方向性は3章か4章で書く。5章は方針を書くのみに留めておき（具体例は施策編）、グリフラで防災・減災と緑量・景観を一度に解消する、well-beingでコミュニティと福祉を一度に解消する、という書き方にした方が、ぱっと見でもわかりやすいし、施策編との棲み分けと繋がりもわかりやすいのでは。

馬場委員

- ・ p.14～15 は「課題」と書いてあるが、「問題」と「課題」が混同しており、(1)の1つ目は問題で2つ目～4つ目は課題で……となっている。書きぶりを統一した方がわかりやすいのではと思った。

赤澤部会長

- ・ 問題・課題とプラスでチャンスに転じる（ピンチはチャンス）という書き方をよくするが、これら3つを書いておくと後に繋がりやすく、未来像を書くような基本計画になると思う。

深町委員

- ・ シビックプライドの観点で、神戸の緑は満足度では約20%の人が満足していて、「どちらかといえば満足」を合わせてやると70%になるが、外からの評価を考えるとこれだけ緑に囲まれたまちというのではない。神戸の人たちはこれが当たり前になっているため、その素晴らしさがあまりよくわかっていないのでは。外国から来た世界のアーティストはみんな山（諏訪山・布引など）に登り、神戸の山にインスピレーションを受けて作品を作っている。それほど、世界の人から見てもこのまちの緑に価値があるものだと思われるが、市民の満足度は20%しかないというギャップに愕然とする。
- ・ p.13「神戸の緑の特徴」で、どれだけこれが素晴らしいことかももう少し表現されても良いのでは、神戸ならではの特性として「六甲山系の緑」が神戸の豊かな緑を形成している根幹のため、六甲山がどういう山で色んな効果があるということをもっと強調した方が良いのでは。
- ・ p.17で「緑に関する活動に参加している市民の割合」が30%弱だったが、この内訳となる活動の種類は他もまちに比べて多彩なのは、と感じる。（毎日登山や間伐など）その活動がどんなものか、ということを生き生きと提示することで、みどりへのかかわり方が具体的に見えてくるのでは。「関わりましょう」と言わなくても関わりたくなるようなものが必要だと思う。
- ・ 外の人が評価しているもの（緑）を市民が知らないということが勿体ない。

赤澤部会長

- ・ 行政は立場上、課題解決型で考えることが多く、逆に私は二大思考（問題・課題とピンチはチャンス）で考えすぎるところがあり、それをつなぐ「今のすばらしさ」をきちんと伝えることは本当に大事だと思う。ここは写真で、皆さんが普段見て「ああ」と思うものを示すのが良い。

事務局

- ・ BE KOBE の時もステートメントの時には神戸の強みや誇りを書いていたように、「市民の方にいかに知ってもらうか」ということを考えたときに、コピーとステートメントが大事なのでは。それを読んだうえで次にどうなるか、というのが来る。
BE KOBE の時に神戸が良い街だということを掲げるようになった。緑においてもそのように掲げていけば良いのでは。

赤澤部会長

- ・ BE KOBE は関連計画にはないのか、大事なように思えるが。
- ・ 他の農業や福祉の関連計画に、今の良いところや、未来の目指すべきキャッチコピーで素晴らしいものがあるかもしれない。これらと「緑生都市」をどうつなげるかという書きぶりはあるのでは。（実践編の小さいコラムにまとめる程度になるかもしれないが）

鳥居委員

- ・ 気になったのは緑の質。
ただ緑を増やせば良いのではなく場所に応じた緑というのがあるため、そこをいかに具体的に書けるかが一番大事だと思う。
- ・ p.15 の課題で「公園施設の耐震化」とあるが緑とどう関連するのか、もっと土砂災害防止や土壌の安定、火災延焼防止など、具体的に植生が持つ防災効果を前面に出す方が良いのでは。施設の耐震化だと緑とは違うイメージになる。
- ・ p.19 と p.20 の図を比較すると、p.19 は「知る」のところに「発信・拡散」で「SNS で発信する」とあるが、p.20 は「深める」に「SNS で発信する」がある。「公園に遊びに友達を誘う」の日本語も気になるがこれは「深める」なのか。

事務局

- ・ 「長寿命化」や「大規模公園」などの言葉が入っているが、これは国の交付金をとる際にここに位置付けがあるかどうかが大きく関わってくるため、ここで専門用語的な話が入ってきている。仰る通り、違和感があり、本編にはもう少しわかりやすい言葉で表現をする必要がある。
一方で、「基本計画のどこに記載があるから、この事業は基本計画に位置付けられている」ということを国に示す必要があるため、実践編にはこのような専門的な用語がでるかもしれないが、本編は書きぶりの見直しをする。
- ・ 絵についても見直しを進め、熟度を高めていく。

赤澤部会長

- ・ 本編の言葉では「防災」だけだが、今は「防災・減災」と言われている。他にも「安全・安心」など、少し整理した方が良い。
- ・ SNS系はSNSだけでなくDXの観点もあって、課題を市民と一緒に解決していくために、市民の声をどう聴くか、みんなの意見やそれに対して行政がやろうとしていることを市民同士でどう共有して、みんなで課題解決できるようにしていくか、というようなツールは今もあるため、これから25年後には全く違うことになっていると思うので、触れておくくらいはした方が良い。
- ・ 国に対して書いておかないといけない項目として、緑化重点地区も書いておかないといけないはずでは。

事務局

- ・ 混乱を招いているが、本編には交付金を目的とした項目を薄くしていく。
- ・ 緑化重点地区や緑地保全配慮地区は実践編に記載する。

天川委員

- ・ 神戸新聞の「声」という投稿欄で、「何十年散歩をしているが、最近楽しくなくなってきた。偶然に神戸市に投稿を受け入れてくれるページが出来たことを知ったので、そこに散歩の風景を送るとすぐに返事が返ってくるのでまた散歩が楽しくなった」というものがあつた。

以前の部会で「市民と市役所で、相互でやり取りができたらいいのに。」と言った際に、本田課長が「その制度はできている。」とおっしゃっていたが、その通りだった。神戸市がおこなっていることを「きちんとやっている」と受け止めている市民もいると思います。

赤澤部会長

- ・ 行政側からすると、「Must（やらないといけないこと）をお願いする」という感じがあり遠慮がちになるが、仕事は「Will」「Can」「Must」で出来ており、Will（やりたいこと）とCan（できること）を市民の方はたくさん持っている。
市民とひとくくりに言っても、みんなどこかで何かを持っているプロなので、そこは遠慮なく「出来ませんか」「やりたくないですか」「楽しいですね」というニュアンスで書けると一番正解かもしれない。

馬場委員

- ・ 神戸市は普段、開発やまちづくりなどセンスが良いものをつくっているが、それがここにあまり伝わってこない。出来ているものは素晴らしいのに、そのイメージがあま

り伝わってこないのが大変残念。きっと取り組めば良いものが出来てくるのは間違いないと思うが、これを見てそこに繋がらないのは勿体ないと思う。

白砂委員

- ・ 章立てについて、第1章、第2章はわかるが、第3章で課題が出てきて、第4章で目標とみどりへのかかわり方が出てくるため、連続性はよくわからない。
課題を出しているのに、それをどう解決するのかということがまず無いといけないのでは。その解決する方向の中で視点が明らかになってきて、こういう施策にする、という風に、ストーリーが明確になれば良いのでは。
- ・ p.19の「知る」「触れる」「深める」の図について、緑のレポートなので緑を書いてわかりやすくするべきで、分かりにくいからといって緑を取ったら本末転倒なのでは。

赤澤部会長

- ・ 章立ては第4章・第5章のあたりになってくると解決するのでは。デザインに関してはデザイン科の先生の仰る通り。
- ・ 第6章について今日議論は無く、他のどの計画でもここはPDCAで終わるが、何かここで変化があるべきだろう。元の計画よりもさらに波及効果を狙い、多分野とコラボするという体制をとっていく（施策間連携とまでは言わないが）点、25年は長すぎるため、変わらないことは25年でやるが変わることは10年ごとで見直していく点、DXのことを書くなら、効率よく、市民の苦情はデジタルの力で簡単に乗り越えること（写真投稿など）が出来たらそのような点、なども踏まえ、第6章でもひと工夫があるのではと思った。